
間に合ってますから！！

此花タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間に合ってますから！！

【Nコード】

N6596Y

【作者名】

此花タロウ

【あらすじ】

高雄 かほり、二十歳。本人いたって普通の（つもり）大学生。だが、そうは問屋がおりさない！ありえない秘密を持つ両親に、超絶美女で傾国の乙女な姉、腹黒アクマなスコン弟…うちの家族はおかしすぎる！！もうテンプレも王道も間に合ってます！！え？異世界にてお気楽ご気楽日帰りトリップ、腹黒美形に金髪俺様王子様に嫁取り婿入り希望？？王道、テンプレどんとこい？…もう、お願いですから勘弁して下さい…（涙目）

これは、ごく普通を望む女の子が、普通でない自身の体質と周囲に

巻き込まれる、愛と哀と合の手募集とボケとツッコミのラブコメ風
味？な物語です…。

はじまり、はじまり？

——国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった——

……じゃなくて。

——玄関のいつものドアを開けると異空間であった。腹の音が鳴った——

……正直すぎる、緊張感のない自分を嫌にもなるし、恨みたくもなる……。

何せ自宅の玄関扉を「ただいま～」と開けたなら、目の前にあるのは見知らぬ風景。

見渡す限りの花、花、花！！青い空、白い雲、そして果てしない花畑！

……一瞬、余所んちの温室にでも出たのかと思いました。

「すみません、間違えました～！！」

条件反射で即、ドアを閉めましたとも。

だが、脳内でもう一人の冷静なツツコミ家の自分がさかさずツツコミをいれる。おいおい、一体どんな豪邸だよ！と。うちの近所にはそんなものはないはずだし何より今は夜だよと。

だが、我が心の叫びも空しく、音に出では情けなくも切実なそれだけで。

ぐ～きゅるるるう～ぐぐう～・・・

こういう異常事態の下、冷たく澄んだ冬の夜空の下で空しく叫んだそれは、再び己の欲求を訴え続ける私の素敵なほどに正直な my empty stomach.

——要は空きつ腹。

だが仕方あるまい、と空いた胃の底で即座に居直る自分がいる。花も恥じらうぴちぴち乙女といえど、腹は減るしお腹も鳴る。是、当然の理。

お腹も鳴らない、トイレも行かないのは少女漫画のヒーローと幼い少女の頭の中のアイドル像だけだ。

大学の帰り、とつくの昔に夜もとつぷりとふけた時刻ともなれば胃が空腹を訴えてもしょうがない。

ごくごく当たり前のこと、人間として当然の欲求であり生理現象だと。たとえ七面倒くさい今現在の状況とはいえど。

人間、腹が減っては戦はできないと言うではあゝりませんか？

同情の余地あり、異議ナ―シ！

独り胸の中、壇上の上から叫び、シュプレヒコール。会議は踊る、そして進みますとも。（何せ一人脳内会議ですからねー。敢えて言うならば「サクサクいこうぜ！」）

そして一人で可決し、これまた一人で心の演壇から降りる。

終わり、おしまい。これをもって第1回脳内会議に幕を下ろす。

そこで一礼。

紳士？としての嗜みだ。うむ。

といっても脳内ですがね。私は女だけど女が紳士を気取って何が悪い？いや、そんなことはあるまい。（何かの構文みたいだな、オィ。笑）

右手に持った豚まん（先ほど立ち寄ったコンビニで買った）をアテに、左手に持ったほかほかの烏龍茶の缶でひとまず休憩といきたいところだが、目の前の異常現象を前にふむ、と改めて考える。

現状を把握すべく第2回脳内会議に突入すべく、再び思考タイムへ突入。

暫し、沈黙考というわけ。

だが、豚まんを食べながら、烏龍茶を飲みながらも考えることはできるだろう、何より冷めたらもったいないしね、と自分の中にすっと明確かつ都合のよい解が落ちた。

一石二鳥。空腹を満たすことは脳の活性化へ結びつく。

お腹も満たされ、豚まんは美味しく食べられ、よい考えも浮かぶやもしれぬ。むしろ一石三鳥だ。

というわけで、とりあえず我が家の門柱にもたれながら豚まん食べます。

所謂立ち食い、というやつですかね。お行儀が悪いですがどうかお許し下さいませ。腹の虫がどうにもこうにも切実な状態なんです。先ほどお聞きおよびのとおり、花咲く乙女としてはあるまじき状態なんです。

ほかほかの豚まんにがぶり、と噛みつけばじゅわっと肉汁のジューシーな風味と筍の歯応えのある感触が口腔内に広がる。

あー生きててよかった。

豚まんと一緒に幸せを噛みしめる。そして、こんなささやかな幸せの積み重ねで人は生きていけるのだと思う。

たとえ、目の前にどんな面倒な事象が転がっていようとも。問題の先送りだと、現実逃避だともう一人の私が意地悪くツツコミをいれようとも。

ちなみにものすごく落ち着いているようだけど、ちょっとくらいは動揺してる。

でもね、こんな状況には既になれっこ、なもんで今さら驚いたりはないのだよ、ジエームズ君。（誰だよ、ジエームズって！）

これがベタな少女漫画や物語の主人公ならば「きゃあ」とか「いやあ〜！」と可愛く悲鳴を上げて驚いてみせ、そこにすかさずヒーロー登場、あっという間に問題解決、そして二人は結ばれましたとさ、めでたしめでたし……となるべきなんだろうけれど、生憎私はそんなキャラじゃないし。

可愛げは何処かに置いてきました。

たぶん、母親の胎内に置き忘れてきたか、超絶美人な上に愛嬌まであるという、まさにミス・パーフェクツな姉君様がお生まれあそばされた際に、私の分までごっすりすべて根こそぎ持って行ってしまったのだろう。

残されたのは冷めたピザよりもあやにくくも空しい、超絶現実主義というツツコミ体質だけ。

間違いなく、私は少女漫画の主人公にはなれないタイプだ。いや、なりたいたいわけじゃないけれど。

……でも、そう言い切っちゃあたり、本当に我ながら可愛げがない。

でもそれはそれ、仕方がないと諦めてる。自分にできること、向いていることをコツコツ頑張る、それが賢い道かと。

「兎の上り坂」、「八仙海を過ぐるに、おのおの神通を顕す」とも言うではないか。

私の場合、目指すはn o t ヒロインb u t ツツコミor傍観者希望！ってやつですかね。

私こと高雄^{たかお} かほり、本日をもって二十歳になりたてほやほや、華の大学2年生は、されど大いなる溜息をつきながらも、目の前の豚まんという唯一の幸福の塊にやけくそばかりに噛みついたのであった。

はじまり、はじまり？（後書き）

メイン連載の上官殿もヒロインもボケボケしてるので、こちらのヒロインは1人ボケツツコミの自給自足、目指してます（笑）

ポケットコミがデフォですから。

もぐもぐ、ごくり。

手に持ったほかほかの豚まんの最後の一口を咀嚼し、あつあつの缶入り烏龍茶を嚥下する。

食べながら考えるつもりがつつい、目の前の欲望に夢中になってしまった。

……人間、素直が一番ですヨネ、と自分自身に言い訳しながらも。

ようやく人心地がついたところで、ほうつと溜息をついた。

時計はすでに21時過ぎを指し示し、空では当然のように月が顔を出し、冬の星座がきらきらと冷たく私を見下ろしている。

そして、今私がつたれている我が家の門柱前の歩道側から向こうへと広がっているのはいたって普通の日常風景で。

ごく普通の住宅街の街並み、ごく普通の日本の夜の風景だ。

一方、石造りの門柱の陰から我が家を見上げれば、外観的にはいつもと変わらない。白い壁、黒い屋根のいたって普通の見慣れた我が家。

門柱から家の玄関までの間には今のご時世、都内で構えた一戸建てにしては奇跡的なほどにやや広めの芝生の庭が広がっており、石造りの小道が門から例の玄関扉までを導いている。

灯りがついていることから、家の中には家族の誰かがいるのだろう。

だが、庭に面したリビングの扉、もしくは塀によじ登ってベラン

ダから室内に入ることはいできない。

なぜなら妻、激LOVEゆえに猛烈な心配性の父のおかげで、一戸建てのくせに全居室が内側から自動的に鍵がかかる仕組みになっているからだ。なので、外から入ることも助けを求めることもできない。

しかも全窓硝子が防弾防音の特殊硝子ときた！

……一体どこの特殊訓練部隊が我が家に攻めてくるとでもいうのですか……??

屋根がパカッと開いてバルカン砲がお目見えしても驚かない自信が私にはありますとも。

そして、父のことだ！！……一体どんなトラップを仕掛けているのか、分かったもんじやない。

しかも、これに関しては父だけとは限らない！

4年ほど前、私のお風呂を覗こうとした下着ドロ兼変質者がトラップにひっかった、と聞いた気がする。しかも、捕まえたのが父の仕掛けたトラップじゃなくて、弟が別に仕掛けてたものだったと母が言ってた…。

父だけでなく、弟もかよ！

一体どれだけ心配性で過保護なんだよ、こちらはどこのお姫様だYO！！と、そのときはなーんにもわかってなかった私は心の中で即座につっこんだ。

だが、当時まだ中学生だった弟は、変質者がどうなったのか、ちゃんと警察に引き渡したのかと質問の嵐を浴びせる私に対し、あの綺麗な顔でにっこり微笑みながら

「かほりちゃんなんにも心配することないんだからね。僕がちゃんとしてあげることから」

そう言って私の頭を撫でるばかりで、私の質問には何にも答えてくれなかった……。

あのときはよく分かってなかったけど……今となればその可哀そうな変質者がどうなったのやら……想像だにしたくありません……！ガクブルガクブル。

それらの数々の出来事を思い出すと……月明かりに輝く我が家の綺麗に整った芝生が、有刺鉄線で囲まれた危険地帯、対戦車もかくやとばかりの地雷原のように見えてくるから不思議だ……。

暗視スコープを下さい。いえ、あっても通りたくなぞありませんが。

切実なほどまでの空腹が若干満たされたせいか、冷たい空気で頭が冷えたのか、先ほどよりもじつくりとことを考えてみる。

先ほども言ったようにこういった事象には確かに慣れっこ、ではあるが冬の寒空の下に自宅から締め出される、という現状はいただけない。

まったくいただけないですとも。

しかもよりによって記念すべき二十歳の誕生日のこの日に。

きつと我が家族のことだからケーキを準備して私の帰りを今か、今かと待っていていることであろう。

大学のゼミで遅くなるから誕生日のご馳走は明日の土曜にしてほしい、と言ったところ「せめてケーキだけでも腕を振るうわ」と言ってくれた母の優しい顔が、「今日は絶対残業しないぞ」と頭を撫でてくれた父のはしゃぎ顔が、「今日はデートの約束はしないでおいだから」とウインクを飛ばした姉の美しい顔が、「今晚は一緒に過ごそうね」と手を握りしめてくれた弟の眩しい微笑が臉に浮かぶ。

あ、ごめん。

膝の上で喉を鳴らしてくれた白猫のタマとパタパタと尾を振ってくれた犬のフレンダーも忘れてないからね。

——まるで今生の別れでもあるまいし。

よりによって急いで帰ってきた誕生日の夜にこうして寒空の下に突っ立っている自分自身に少しアンニュイな気分なのだろう。

ややもすれば少々気分が落ち込む。

目の前には我が家があるのに、扉の向こうは我が家じゃない。

おかしい。おかしいですとも。

本日をもって二十歳デビューをしたばかりの私は酒を飲んだことはないのだから酔っているはずがない。

だが、もしや寝ぼけていたのかもしれない。ぼうつと白昼夢（夜だけど。笑）でも見たのかもしれない。

まだまだ中身の残った烏龍茶を片手に、先ほど見た異常事態を確認すべく、再度我が家の玄関扉に歩み寄り、そうつと開けてみる。

……やはり、眼前に広がるは一面のきららしいお花畑。ピンクに黄色、白に赤に……うとうう。

一昔前の少女漫画ならばアゲハ蝶にモンシロチョウが飛び、まっ白なふわふわのわんこが走り回ってそうなくらい少女趣味で、すっかりこちらの夜目に慣れた我が目がつぶれそうなくらい鮮やかな色彩の花畑が広がっている。

扉を開けばどこかに繋がる。そりゃ当たり前。

当たり前だの前田 修一……は、小学校のときに隣の席だった男の子で、給食のときに「俺、鼻からうどん出せるんだぜ！」と自慢

して無茶した拳句、保健室送りに……って違うし！！

何でそんな無駄なこと覚えてる？
今、思い出す？

いや、別に前田君が無駄とかじゃなくて……いや、彼の見せた己が芸を貫き通そうとした意地はある意味尊敬に値するよ？

たとえそれが一銭の得になることでも、尊敬の念で見られるようなことではなくてもみんなを笑わせよう、芸を披露しようとするその心意気やよし。

鼻から出たうどんが逆流しかけ、苦しみながらもなんとか笑って見せた彼はある意味勇者……って！！

あゝ！！やっぱり今はそんなことはどうでもいいから！

話の其れ具合が、滑りっぷりがまさに最近人気の某●国流恋愛ドラマのヒロインとヒーローと同じくらいすれ違ってるから！

軌道修正願います。

内角低め、ストレートでお願いします。

……野球の話をしたいではありません。

ついボケという名の現実逃避をしようとする自分自身に即ツッコミを入れる。合の手ぶりーず。

あ、野球拳でもありませんよ？え、そんな遊び知らない??

よいこは知ってはいけない、恐るべき大人の遊戯なんです。親御さんに聞いてはいけません……生あたたかい、疑うような視線が返ってきますから。

え？私は何で知ってるのかって？

..... (黙)

はい！

はい、はい、はい！話がずれてます！戻す、戻す！戻しましょう！今すぐ、即座に、ご利用は計画的に。

..... 一人脳内会議が暴走しすぎた。とりあえず深呼吸。反省な
ら後でもできる、そしてサルでもできるのだから。

ふうふうーすーはーすーはー。

一通り脳内暴走した後でくたびれたからか、深呼吸の成果か、だ
いぶ落ちて着いてきた気がする。

さらに気分を落ち着けるためにも、まだまだ掌の中で私に温もり
を分けてくれている烏龍茶を再び口に含む。

こういう突発的事態に陥ると分かっていたならば、砂糖たっぷり、
ミルクたっぷりなミルクティーを選べばよかったのかもしれない。

鈍った脳をダイレクトに動かすためには、糖分ならぬブドウ糖を
ブチ込むべきなんだけだな。

はあ、はてさてどうしたものかしらん。

とりあえず、異空間へと繋がる玄関扉の間にブロックを挟んで
開けたまま、先ほどもたれていた入口の門柱まで戻った。再度、
石造りの柱に背を預け、煌々と照らす門柱灯の灯りを頼りにブーツ
のつま先をぼんやりと見つめる。

だが既に12月の声を間近く聞いている11月も後半の冬の外の
空気はこの肌身には寒すぎる、冷たすぎる。

哀しいことにコート一枚しか着てない身、カイロはおるか手袋も

マフラーも持つてきてないよ。

今頃はあったかいおうちでソファに寝っころびながら膝には飼い猫のタマ、足元には飼い犬のフレンドーをはべらせながらTVでも見てたはずなのに。

母親の「ケーキ、食べましよう」の一声に胸を躍らせていたはずなのに。

……北風が身に染みるぜ。

とりあえず、これから行動すべき今後の動静に思いを馳せる。面倒事は嫌いなんだよね、とぶつぶつひとりごちながら。

うーん、どうやったらこれ、元に戻るんだろう、どうすれば本来の我が家に入れるんだろう？

かといって扉の向こう、あの花畑に足を踏み出すのはためらわれる。

いくらこちらの北風が心身を凍えさせつつあるとも。いくらあちらの陽射しがいかにもあたたかで、爽やかに花弁を揺らす空気のどかにやさしく私を誘っておろうとも。

——嫌な予感がする。すごく嫌な予感。

こういう予感ばかりはたいてい当たる。嫌うちゅうくらいに。

もしもあちらの穏やかな日差しに誘われて、扉の向こうに足を一歩踏み出したが最後……きっとそこは底なしな泥の沼な気がする。

踏み出したら抜けられない、逃げられなさそうだと私の本能、野生の感、第六感がそう叫んでいる。

だから行っではいけないと。

そう思えば、この我が家の玄関扉という平和かつ見慣れた日常的な物が——扉の向こうにうるわしの花畑を広げて獲物を誘い込もう

と口を開けている危険なブツに見えてきた。

ぶうるるるるる！！

寒気がしてきた。それも、この身を苛む冷たい冬の夜風のせいとは言い難い、別の意味の寒気だ。

かといって、こんなところにぼうつと突っ立っているのも身体的にも世間の外間的にもよいとはいえないだろう。

ったく、もしご近所のどなたかに見られたならば、完全不審者ではないか。

「高雄さん家のかほりちゃんたら夜にひとりで締め出されてたのよ、一体どうしたのかしら」とか何とか言われて、親切なお向かいのおばちゃんとかに声をかけられて「すみません、扉の向こうが異空間に繋がるんです」とか言おうものなら、即座に奇人変人、まさに電○系の危険人物、可哀そうな子といった、見えないレッテルをぺたんと貼られることだろう。

それは困る。ものすごく困る。

人間関係、およびご近所づきあいはなるべく円滑かつ事なきを得ず平坦に、が私のモットーだ。

そして、もしご近所さんにこの姿を見咎められなくとも、たまたま通り過ぎた他人に家出娘・もしくは空き巣と思われて警察に通報されても困る。

幸い携帯は持っている。いったん扉を閉めて、その後に父か弟にでも助けを求めよう、そうしよう。

もしかしたら私の側から開けると異空間に繋がるだけで、向こう側から開けて貰えば普通に玄関に繋がるのかもしれない。

家族の誰とも連絡が取れなければ24時間営業のファミレスで夜を明かすか、親友の望の家にでも転がり込めばいいだろう。

まずはこのいかにも危険なブーツ、もとい玄関扉は閉めてしまうに限る。

善は急げとばかりに今の今まで背を預けていた我が家の門柱からよつこらさと身を起こす。私の体温で僅かに温もっていた石の柱から背を外せば、隙間風が身を切るようだ。

すっかり冷えた身体に唯一の暖でもある、掌の中で熱を発する烏龍茶の缶を握りしめたまま、玄関扉に向かうべく足を踏み出した。

ブーツの靴底に残った我が家の庭土がじゃり、とこすれる聞き慣れた音を聞きながら。

とりあえず、薄く開けたままの玄関扉の前に立ち、間に挟んだブーツクを取るべく身をかがめた。

邪魔なブーツクを外しながら一体、何処の誰がこんな悪戯？をやったのか……ぶつぶつと悪態をつきながらドアノブに手を伸ばそうとしたその瞬間、ジャストナウ、いかにもこういったことをやりそうな、思い当たる人物の名が一人、不本意ながらも心中に思い浮かんだ！

ポケッコミがデフォですから。(後書き)

かほり……飛ばしすぎです。

押してダメなら引いてもダメ！

ぼわん、と心に浮かんだとある危険人物の顔と名を……即座に、直ちに自分自身で否定する。それこそ全速全力破竹の勢いで！

いやいやいや！それはない！！ないって！いや、違うだろう！お願い、そうであって下さい！！

私自身の心はそれを否定し、拒否したい。私のようなごく普通の人間は面倒ごととは嫌いなんです、派手なことも苦手なんです。しかし、先ほど摂取した豚まんて栄養を、烏龍茶で温度を得た我が脳が、私という主に逆らいフルスロットル開始。

たららららららら。

スロットが脳内で廻る。そしてあつという間にごとん、という音がした。

それは脳内スロットが止まる音。そしてスロットの出口から転げ落ちたボールには——あの、忘れもしないあの顔がくつきりと印字されていた。

犯人は奴だ！まちがいない！！

思わず眩暈がした。

くらり、と目の前が真っ暗になる。いや、ドアの向こうの異世界

は青空とはいえ、こちらは既に夜だから暗いのは当然だけど。
でもでも、なんだか幻聴も聞こえる気がする。私の名を呼ぶ声が
聞こえるような……。

いやいやいや。

幻聴だけでなく幻覚も視える気がするよ……。扉の向こう、花畑
の向こうから私の名を呼びながら走ってくる人影が見えるような……
……って！！

ぎゃ　　おう　　う　　う　　！　　出　　！　　！　　！　　！

「カホリ！会いたかった！！！！って、ちょ、なんでドア閉めよ
うとするの？未来の旦那様に何デスカ、その仕打ち！！」

「うとうう煩い、自分の国へ帰れ異世界産ストーリー！ここは日本
です！異世界からの変質者の輸出は固辞しておりまーすーかーら！
！」

「またまた恥ずかしがっちゃって。俺に会いたかったんだろ。いい
子だからその手をドアから離しなさい？」

「ふぬぬぬぬ。やめて下さい！新聞も宗教も頭のよくなる薬も金髪
美形も王道もテンプレも間に合ってますから！だーかーらーどうか
お帰り下さい——！！」

「またまたー真っ赤になっちゃってーふふふ」

交渉決裂以前に、交渉すらできません！そしてその前にまったく
もって会話とすらなりません！いや、なれませんか！！

扉の向こうの花畑側からはい出ようとしてくる異世界産ストーリーカ

「こと、通称「あ」の字の人（命名、私）とそれを必死に押し返そうとする私。

輝く金髪に海のような青い瞳、バックには花畑しよった少女漫画のヒーローも真っ青、ハリウッド俳優も裸足で逃げ出すそのくらびやかな美貌と細マツチョな肢体も全てが私には凶悪な肉食獣のそれにしか見えません。

怖いですが、助けて下さい、おまわりさん！ここにストーカーがいますよー！！いたいけな女の子が狙われてますー！

金髪碧眼、物語の王子様のようなテンプレ美形騎士とこうして家のドアというごくごく庶民的なツール一枚はさんで押し合いへし合う女子大生の姿は、はたから見れば滑稽なのかもしれない。

だが、少なくとも私は命がけだ！この両腕に、この瞬間に私の未来の全てがかかっているのだから、そりや必死にもなるうというものの。

最近見かけなかったからようやく諦めたんだろう、へへん、ビバ平和な毎日！と油断してた！しまくってました！！

喰うか喰われるか！私は喰いたくなぞないけれど、向こうは私を喰う気マンマンだよー！！いやー！！！！

ギシギシギシギシギシ

我が家のドアがいやゝな悲鳴を上げております。

押し合いへし合い、押し合いへしあい。えいおーえいおーえいえいおー！

小学校以来の綱引きの逆の気分です。あれ、綱引きならぬドア押し、ですかい。

ただし、この場合、私の身の安全と貞操の危機がかかっているだけに真剣さが比じゃない！！はんぱじゃないから、へいジョニー！

（涙目）

こんな殺伐とした、命がけな押し合いは初めてでーすーかーらー。
ふぬうつうつうつー！！

しかし、そこは弱い女の子。異世界成人男子、しかも現役ばり
ばりの騎士の腕力には敵うはずもなく……あっという間に押し負け
ました。

いえ、押し負けるどころか、「あ」の字の人のとんでもない馬鹿
力に、雇ごと吹っ飛ばされました……。

「あ」と思った瞬間、勢い余って雇ごと後ろに吹っ飛ば私。

それを追いかけるように向こうから跳びかかろうと助走する「あ」
の字の人の青い目がぎりり、と凶悪な光を帯びたのが見えた。

宙を舞いながらも、吹っ飛びながらも走馬灯のように今日一日の
出来事が脳裏をよぎります……だめだ、これぞバッドエンドフラグ。
今日こそ誘拐される。やられてしまう……。

助けて、誰か——お父さん、お母さん——鎮^{しづか}！！

「あ」の字の人の手が目の前に伸びてきたその瞬間、思わずぎゅ
っと目を瞑る。

だが腕を掴まれるその直前、たくましい何かに、誰かの胸に私は
抱きとめられた。ふわり、と嗅ぎ慣れた香りが鼻腔をくすぐる。

——それは私の大好きなサイブレスの香り。

そして、その香りを纏うのは——私の知ってる限りただ一人。ジ
ヤスミンの香りを好む父と母でもなく、ローズを好む姉でもなく——
……。

その瞬間、ぱちり、思わず目を見開いた。

見上た視線の先、私の顔の遙か上から優しくこちらを見下ろすサ

イブレスの香りを纏ったその人と目と目が合う。

さらさらのこげ茶の髪、紅茶色の瞳のその人は再び優しく私に微笑みかけた後、その綺麗な顔からは出たとは思えないほどの低く、唸るような、威嚇するかのような冷たい声を出した。

「ジークベルト・アルノルト・ヴェンツェル・ブルクハルト・クルト・ライマー・フォルクマール・エルレンマイヤー？……うちのかほりちゃんに近寄るな、と僕は言ったよね？」

頭悪いのかな？それとも耳が悪いの？若年性の痴呆症なのかな？？？あ、全部か。そして悪いのは生まれつきか。

くすくす笑いながら、でも私の頭を優しく撫でながら強烈な嫌味のブローをお腹の底から繰り出したその人は——たかお しゅうか 高雄 鎮。

名字が名字だけに、英語とかで逆に読むと、どっちが名字でどっちが名前だか分かんないような名前ですが、私の弟です。

とりあえず……助かったあ……。

そしてあの長ったらしい名前をよく舌嚙まずに言えるなあ……しかも覚えてたんだ、とのんきなことを思ってしまう私はやっぱりどこかの何かが足りないのだろうか……？

ドアを開けたらそこは異空間な展開と先ほどまでの押し合いへし合い、押し売り・勧誘員もかくや、とばかりの攻防戦で疲れ切った拳句、思わぬ救世主に心から安堵した私は、そのままゆっくりと意識を手放したのだった——。。。

押してダメなら引いてもダメ！（後書き）

金髪碧眼美形騎士は王道・テンプレですよ？

しかも名前ながっつ！

腹黒シスコン弟もトラップといい…何だかありそうですw w

気づかないことは幸せなことです

その暗闇の中、仄かに瞬く橙色の光だけが唯一の光源だった。

それはやわらかくもたよりなく——だが、確かな熱を含んだ光がぼんやりと私の頬を照らし上げている。

「さ、かほりちゃん……？」

目の前の紅茶色の瞳の持ち主が優しく、どこか妖しく誘うような口調で私を促す。

濃い闇に橙色の光がちらちらと瞬く中、浮かびあがるそれは今まで見たことがないような色をたたえており——紅い色に染まって見えるのは気のせいだろうか？

「……う、うん……でも……」

それを綺麗だと、とても綺麗だと思う。

でもきつと——それはこの光のせい。そして、私も同じように紅に染まっているのかもしれない。自身の頬に手を当てればほんのりと熱を孕んでいる。だが、それは暖房のきいた部屋のせいだとは、さすがの私にも言えなかった。

「そんなに恥ずかしがらないで……。僕はずっと、ずっとこの日を待ってただよ？」

「ええ……？でも、何だか未だに実感がわかないというか。こう見られていると恥ずかしいというか……」

そう口にもれば、ゆっくりとその手が私の頬へ向かって伸びてくる。

「ふふ……可愛い。僕のかほりちゃん是世界で一番可愛いよ？だから、ね……？」

長く、繊細なその指が優しく私の頬を撫で上げる。そして、その指のくすぐるような、どこか肌をざわつかせる感触に思わずぴくりと反応してしまう自分がいつもの自分じゃないような気がして——どこか気恥ずかしい。触れられた箇所から、頬がさらに温度を上げた気がするのもやはり——気のせい、なのだろうか——？

——私には、分からない。

「……し・鎮……？」

眼前でちらり、ちらりと橙色の光がゆらめく。

その向こうで口の端を上げて微笑む弟の顔はいつもながらに綺麗で優しげだったが——その紅く色づいて見える瞳がどこか、知らない余所の男の人のように見えてささやかな不安を煽る。

「ね、そろそろいいでしょ？それともまだおあずけ？かほりちゃん……もしかして焦らしてる？」

「……わ、わかった。じゃあ、やってみる。私、頑張るから！」

顔をあげ、心もち顎を上げてみる。唇を若干上向け、すうっと息を吸い込んだ。

潔さが私の持ち味、迷うなぞ、ためらうなぞ私らしくない、そうではないか？そう、女は度胸と思い切り。

そして――肺活量だ！

私は目の前に鎮座する特大のバースデーケーキに立てられた二十本のろうそくの火を見事、一息のもとに吹き消したのだった

いよおおっしー！よしきた私、よくやった！

んん？冒頭の会話が妙に聞えた、ですと？？ちょ、何変なこと想像してんのー！！

相手は仮にも弟！一歳下の弟の鎮でーすーからー！！

二十歳にもなって今さら、しかもみんなに見つめられながら二十本ものろうそくの火を吹き消すなんて…、と渋る姉を優しく宥める弟の図、という世にも美しい姉弟愛の会話ですよ？

これが我が家ではごく普通の日常です。

もっとも、自分家じぶんちの常識は他人家よそんちの非常識とも言いますから、そこんとこ世の中すべての常識と照らし合わせて、突き詰めて詳しく述べてみる、と言われたら困るんだけど。

ま、他人よそはよそ、自分うちはうち、とも言いますし、ネ。

でもでもー！！これはれっきとした家族愛です、うちは仲良し家族なんですー！！

うん、そこんとこ、ヨロシコ（って誰に言っただか……）

脳内ボケツツコミという螺旋階段から抜け出れば、先程までのまっ暗闇から一転、いつの間にやら再び明かりが灯された室内で家族に囲まれていた。

「二十歳のお誕生日おめでとー！！」「これで成人だね」などと、

惜しめない笑顔と祝いの言葉を注いでくれる家族に自然と目元と口元が緩んで笑顔になる。

大事な家族、愛する家族、この世で一番私を愛してくれ、私自身も心から大事に思う存在。

改めてその大切さが、ありがたさが心にしみいる。

家族がいて、お誕生日おめでとうと言ってくれて心からお祝いして貰えることは当たり前なようでそうじゃない、とても贅沢な幸せだ。

生まれてきて今日でちょうど二十年、ずっとそばにいてくれた家族がやっぱり今もそばにいて、愛情を向けてくれている。

そんな幸せ。

それは先ほど、寒空の下で幸福の塊として噛みしめた肉まんのようなもの。

ものすごく高価なものとかそんなんじゃないただ、じんわりとしたさやかなぬくもりを、幸せをくれる大事なものの。

改めてそれに気づくことがある。

自分の手の中にはちゃんとあったかで、大事なものが残っているんだって。幸せはすべしやるな何かじゃなくて、今手の中にあるぬくもりとそれを幸せだとちゃんと考えるころなんだってこと。

そして、その幸せのかたまりそのもの、一番身近で当たり前で———だけど何よりも大切なもの。それが私にとっての家族のみんななんだ。

世の中の常識とか普通とか平凡というありきたりで、でも安全かつらくちんな基準からは完全場外！コースアウトもいいところ！！なくらい、色々とズレまくった家族だけれど———私にとってはかけがえのない存在だ。

たとえキラキラと輝くまばゆい宝石のような家族みんなの中で、私だけ

がごく普通の石つころ、一山いくら、十把一からげの手のつけようがないほど平凡で、妙な体質以外ごくごくふつーの人間だとしても、むしろその厄介な体質のせいで、ある意味みんなのお荷物的存在だとしても。

だつて私達は「家族」だもの。

私はみんなが大事だし、みんなも私を大事に思ってくれてることがすごく伝わってくる。

——それはずっとこれまでも変わらないし、これから変わることもないであろう大切なもの。そんなものが一体どれだけこの世の中にあるだろうか？

そして、それを手に入れることができる者が一体どれほどいるのだろうか？

以前、永遠なんて、変わらぬものがあるなぞ信じない、とある人は言った。

でもね、私は思うの。

永遠に近いものがあると、きつとずっと変わらず大事なものがあると思うのは素敵なことじゃないかなって？そしてそれを信じたいとは思わない？

もしかしてそれもいつかは姿・カタチを変えるかもしれないし、消えていくこともあるのかもしれない。でも、胸に残る気持ちとそれを大事に思い、思われた記憶とこころは消えないんじゃないかな。私はそのときそう思ったの。

へへ、誕生日のせいかな？私にしては珍しく、ちょっと感傷的になっちゃった。

「かほりちゃん？」

「ん？」

気がつけば、いつのまにやら再び、鎮が私の顔を隣の席から覗き込むように見つめていた。いつもの脳内ボケツコミの螺旋階段ではなく、今度は記憶と思考の小道に入り込んでいたらしい。放っておくと自分の世界に入っちゃうのが私の悪い癖！

いかん、いかんぞと反省しながらゆつくりとそちらを見上げれば、いつもの透明な紅茶色の瞳が優しい光を浮かべて私を見下ろす。

やはり先ほど、紅く光って見えたのは単なるろくそくの光のせい、もしくは私の見間違いだったのかな？

「お誕生日、おめでとう」

そう言ってくれた弟は、椅子に座った身体ごとこちらに向けている。ブラックジョークを履いた脚の膝にきちんと両手を揃え、ぴしりと正したその姿勢は礼儀作法の教本に出てきそうなほど綺麗な。こりやまたご丁寧にありがとうゴザイマス。

「うん、ありがとう！」

こちらも礼にのっとり、ぺこりと軽く頭をさげて会釈を返した。ふふふ、と二人で笑みを交わす。

「これで日本では成人、だね」

「ん？ああ、そうだね。まあ、成人式は来年だし、特に何が変わるってわけでもない気がするんだけど……。あんまりこれといって実感がないというか」

へにや、と成人女性らしからぬ気の抜けた笑いを浮かべれば、眼前の綺麗な顔のこれまた綺麗な瞳が嬉しそうに細められた。

「ん——・今はそう思うかもしれないけど、たぶん、これから色々あると思うよ?」

弟の唇が口の中で呟くようにその言を繰り返す。「そう……色々、と、ね……」と。

それは私に対してというよりもむしろ、まるで先程発したばかりの自身の言葉の輪郭をなぞるようで、何か、自分自身に言い聞かせているかのようだった。

視線を遠いどこかに向け、何やらぶつぶつと言いながら考え事にふけり始める。人差し指を唇に当て、視線を空に飛ばしているときは、鎮が何か難しいことを考えているときのお決まりの癖だ。

だが、私のいたつてのんきでおとぼけさん、かつ平和ボケした思考は今思えば意味深な、そして暗に何かを含んだような先程の鎮の発言や何やら考え込み始めた、そのときの表情を華麗にスルーし、全然違う思考の波へと彷徨った拳句、どんぶらこっこと、とんちんかな方向へと流れていったのだった。

そう、弟の綺麗な顔をつくづく眺める、というありそうで意外とない機会に。^{チャンス}

今度は私の代わりに弟が考え込んでいるのをいいことに、じじいと見上げる。父とも母や姉とも異なる系統の美。それを無料で鑑賞できるなぞ、家族ならではの特権だ。

カラーもトリートメントもしないのにこげ茶色の髪は思わず触りたくなるほどやわらかそうで、額にさらりとかかっている。考え事をしているせいか、きゅっと眇められた紅茶色の瞳は綺麗な二重をくつきりと描き、妬ましいほど長い睫毛が頬に影を落としている。

うーん……見た目も中身も出来すぎるくらいよくできて、おね

「ちゃんとしてはちょっと淋しいぞ？そして、一歳下の弟とはいえ、男とはいえ、ほんとに綺麗な顔だな、おい。」

一応女の身の、しかも姉の私としてはむしろ居たたまれなくなるくらいだ。鑑賞する分にはオッケイ、カマ〜ン、バチコーイ！！な感じなんだけど、並んで外を歩くのは比べられそうでちょっと勘弁な感じ。

分かるよね？この気持ち。

んん？なに、何かな？鎮ちゃん、何で君がそんなに嬉しそうにするのかね？

おおよのよ？どうしてまた少女漫画のヒロインのようにはにかで頬を染めるのかね？？

今度は瞳の代わりにどんどん頬が紅くなっていつてますよ、にーさん？……本当に、色々と器用な子なこと。くそう……可愛いじゃないか！

「あんまり見つめられると僕も恥ずかしいよ？みんながいることだし……ね？」

ありやりや、どうやら失礼なくらいに眺めていたらしい。

鎮が首をこちらにかしげながら少し、照れたようにひっそりと私の耳元に囁く。ふわっとサイブレスの香りがシャツの襟元からほんのり鼻腔をくすぐり、今度は私が赤くなる番だった。慌ててその身体を右へと押し返し、距離と空間を取る。

私の凝視のせいであつたかの綺麗な顔に穴が空くところでしたよ。

こりやまた失礼！失敬、失敬。失敬千万しました！

我が非礼を詫びてから、今度は目の前の母お手製のケーキに視線を移し、改めてうつとりと眺める。

大きな真つ白のデコレーションケーキの上には、先ほど吹き消したピンクに黄色、白などの色とりどりの20本のろうそくがまあるく、円を描くように綺麗に差されており「Happy Birthday Dear Kahori」と描かれたチョコプレートが、二十歳の誕生日だということを改めて祝ってくれているようで……心の底からじんとくる。

ちなみにケーキの土台部分はスポンジケーキではなく私の好物である、ふわっふわのシフォンケーキでできており、生クリームとたっぷりの苺とブルーベリー、ラズベリーでデコレーションされた母の力作、これぞまさにお誕生日様仕様！

そこへ母の鶴の一声が響く。「ケーキ切りましょ」はいな、喜んで♪

んん…あれれ？都合よく、何かを忘れてるような気がするぞ？何かあったような…誰か会ったような………イイエ、シリマセン。ナンニモナカツタシ、ダレニモアイマセンデシタヨ？ネ？ネ？

そうして私はまたもや問題を棚上げよろしく、スルーした結果、心からにして本日最高の笑顔を母へ返したのだった。

だが……そうは問屋が卸さない、ということをしてこの後、すぐに思い知るのだった。

リビングのソファに転がされた非現実と言う名の、しかして確実に今この場という現実に存在する物体Xから目をそらしても何もいいことなぞないのだと。

あ、何だかもぞもぞしてる……「あ」の字の人、またの名を「歩く厄介事」にして「面倒事を喚ぶ男」、と言う名の人物が目覚ましらしい……。おそろ〜ん……。

あああゝゝ！！面倒事は間に合ってますから！！

気づかないことは幸せなことです（後書き）

前話まですっ飛ばしすぎた感がある気がします・・・（汗）

でも、こんなお話をお気に入り登録下さった方、読んで下さった方には心より感謝、感謝です。

ありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6596y/>

間に合ってますから！！

2011年12月3日14時46分発行